研究論文

スペインの庭（2）[1]

鳥居徳敏

6．セビーリャ王宮

アル・アンダルスとは中世のイスラム圏スペインを指す名称である。1086年、セビーリャはムラービト朝アル・アンダルスの首都になり、特に1145年以降は、同圏ムワッヒド朝の首都として繁栄した。この時の建築遺構がジャーミー・モスクのミナレット(1184-95)、すなわち現在のセビーリャ大聖堂鐘塔『ヒラルダの塔』であり、同パティオは前稿で指摘した『オレンジのパティオ』として知られている。この他にも、同時代の貴重なパティオがセビーリャ王宮に残されており、特に最近の考古学的調査・研究、さらには復元作業の進展により当時の様相がより一層明確にされている[2]。

現在のセビーリャ王宮『レアーレス・アルカサレス』は、後ウマイヤ朝アブド・アッラフマーン２世（822-52）の時代、ヴァイキングによる破壊後、シリア人アブド・アッラー・B.シナンにより着手された部分を核として拡張されてきた。同王宮が急速に拡大したのは、上記したムワッヒド朝首都になった12世紀であり、大々的に改造され、多くの増築もなされた。1248年、セビーリャはフェルナンド３世聖王（1217-52）により再征服され、王宮はキリスト教徒の手でゴシックでの改造がなされた。さらに一世紀後の1356年頃にはムワッヒド朝時代の王宮部を取り壊し、ペドロ1世残虐王（1350-69）によるムデハル王宮が建設され、15世紀にはカトリック両王による増築、16世紀のカルロス５世以降18世紀までは広大な庭園が造営されて今日に至っている。

本稿ではルネサンスからバロック時代に整備された後者庭園ではなく、中世

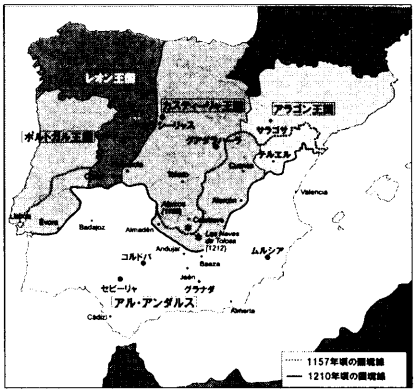

図１　13世紀初頭のイベリア半島国境線、南側白地部はイスラム圏

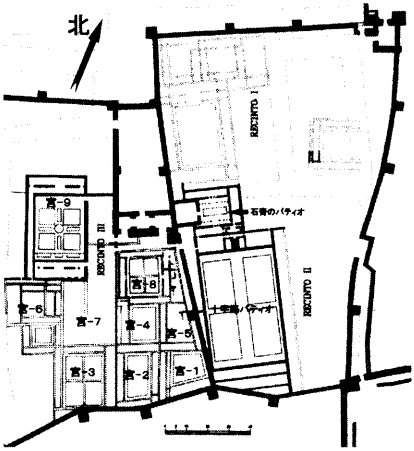

図２　セビーリャ王宮、ムワッヒド朝時代（12-13世紀、M.Á.Tabales による）

のパティオ庭園、すなわちムワッヒド朝時代の『モンテリア宮』パティオ、『石膏のパティオ』、『インディアス通商院パティオ』、『十字路パティオ』、およびペドロ王宮の『ドンセーリャス（女官たち）のパティオ』の５つを扱う。

図２は最近の発掘調査（1997-2000）に基づくムワッヒド朝時代の王宮の全貌である。南東に中核となる『十字路パティオ』の王宮、その北側に『石膏のパティオ』、そして北西に宮-９の『インディアス通商院パティオ』が位置する。発掘の結果、宮-３、および宮-８とも田の字型の十字路パティオであったことが判明している。この宮-８が『モンテリア宮』であり、現在のモンテリアのパティオに位置した。図３はゴシック期に『十字路パティオ』王宮が改造され、後に、ペドロ１世残虐王により宮-１から宮-５が取り壊され、その上にムデハル王宮が建設されたことを示す。同時に『モンテリア宮』が取壊され、現モンテリアのパティオが整備される。

６．１．『モンテリア宮』パティオ

この『モンテリア宮』は12世紀半ば頃に着工され、その後、何度となく増改築の憂き目にあい、かつ1356年のペドロ王宮の建設に際し、完全に消滅した。

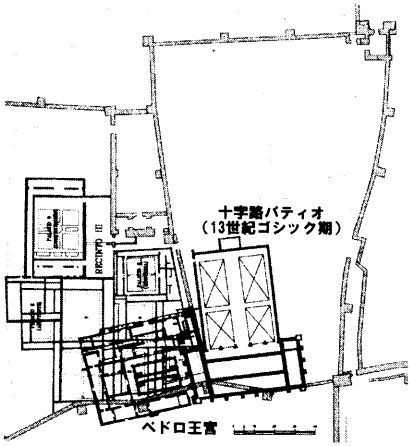

図3　セビーリャ王宮、ゴシック期増改築
（1356年頃、M.Á.Tabales による）

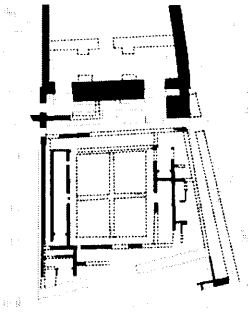

図4　セビーリャ王宮、モンテリア宮平面
図（M.Á.Tabales による）

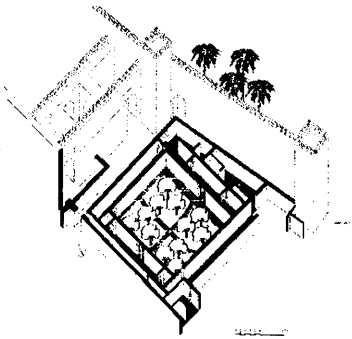

図5　セビーリャ王宮、モンテリア宮鳥瞰
図（M.Á.Tabales による）

この存在が明らかにされたのは1997年に始まる発掘調査の結果であり、図4のような十字路のパティオを中核に形成されていた。

パティオは16.7×18mの大きさでほぼ正方形であり、東西と南の周壁側の通路幅が1.4m、北のそれはわずか0.5mと狭く、十字路幅は約0.8mである。4周の通路の内側全長に水路が走り、4隅には通路面から1mほど下の位置から立ち上がる半円形の大きな縦管が設置された。北西の角で鉛管により給水され、南東の角で排水される。おそらく、こちら側に存在した水洗トイレに給水されていたことであろう。4周の通路と十字路では約1mの高低差があり、十字路の4端部にはそれぞれ5つの踏み段よりなる階段が付き、その下を水路が走るため、水は連続して流れる。北側に延びる十字路下部に小径の管が走っていることから、パティオ中央の十字路交差部には噴水盤の存在が推測される。十字路で4区画された地面はさらに0.5mほど下がり、4周の通路からは1.5mほどの高低差があることから、果樹やオリーブの植栽が想定できよう。後述す

るように、これだけの高低差があれば、通路から容易に果実を取ることができたと考えられるからだ。

このように判明した十字路パティオは、以下のように必ずしも一般的ではない諸特徴を持つ。1．十字路パティオの一般である長方形でなく、正方形であること。2．十字路の幅が0.8mと狭いこと。3．パティオ中央に小さな噴水盤が推測されるものの、注目すべきような池が存在しないこと。4．4周を流れる水路は一般には見られないこと[3]。また、パティオ全般が居室の床面から1.5mも掘り下げられていることや、今日のパティオや歴史遺産として知られているパティオに見られない形式であることに注目する必要があろう。

6．2．『十字路パティオ』

『十字路パティオ』は名称が示す通り、田の字型プランのパティオであり、

図6　セビーリャ王宮、現『十字路パティオ』

図7　セビーリャ王宮、「マリア・デ・パディーリャの水槽」

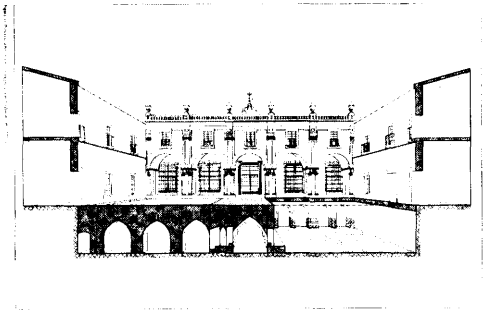

図8　セビーリャ王宮、現『十字路パティオ』断面構成（M.Á.Tabales による）

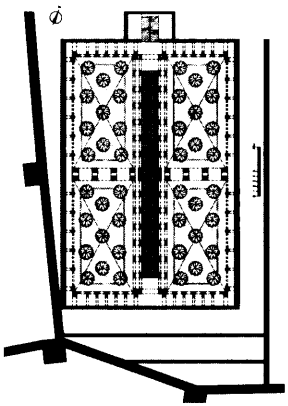

図９　セビーリャ王宮、『十字路パティオ』、ムワッヒド期推定下層平面図（M.Á.Tabales による）

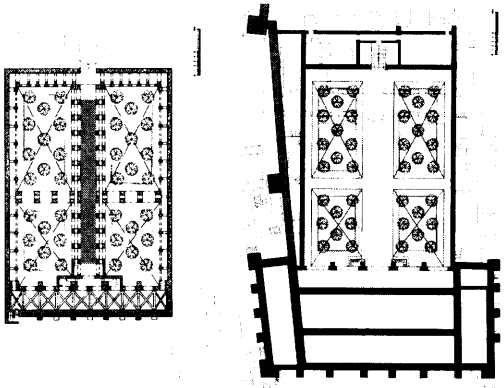

図10-11　セビーリャ王宮、『十字路パティオ』、ゴシック期推定下層・上層平面図（M.Á.Tabales による）

セビーリャ王宮の最も古い中核部を形成し、ムワッヒド朝初期の段階で全面的に改造されたと考えられている。現状（図６）は1755年のリスンボン地震で修復・改造されたバロック建築に囲まれて位置する大きなパティオで、イスラム時代の十字路パティオの面影は全く見られない。実はこのパティオ、地下約５m弱の位置に低層部のパティオを持った。すなわち、上下二層のパティオで構成されているのだ（図８）。現在でも南側の庭園から地下に入ると、『マリア・デ・パディーリャの水槽 Baño de Doña María de Padilla』（図７）と呼ばれる細長い池の地下室に入ることができる。この水槽が十字路パティオの南北縦軸路に切られた池であった。

元来、王宮の敷地は南側を流れていたタガレーテ川の岸辺の傾斜地に位置した。そのため、北側の『石膏のパティオ』の床面とこのパティオの床面とでは５m近い高低差があり、これを利用して二層のパティオが形成された。1973-80年の間に調査した当時の王宮保存建築家ラファエル・マンサーノは、当初、上層部南北の短辺部前のテラスと両者をつなぐ縦軸の中央路が建設され、下層部の中央路に池が掘られた、と考える。その後、長辺両側の通路、およびそれらと縦軸中央路とを結ぶ横断路が建設され、上下二層の十字路パティオが形成

されると同時に、４つに分割されたそれぞれの下層庭園部も再度４分割され４つの十字路パティオが作られ、大小５つの十字路パティオが出現した、ともムワッヒド朝の『十字路パティオ』王宮を推測する[4]。

図９はムワッヒド朝時代の『十字路パティオ』（約34.4×47.4m）下層推定平面図だが、この推定図では４分割された植栽部庭園は田の字型プランを採用していない。これに対し、図10-12はキリスト教徒によるセビーリャ再征服後、アルフォンソ10世（1252-84）により改造されたゴシック期の上・下層平面図と鳥瞰推定図である。おそらく南棟に謁見ホール等の主要諸室を新設するための増改築がなされ、その結果、旧パティオ南側にテラスが侵入し、対称性が崩される。この増改築と同時に、細長い池の縦軸中央路も11ベイよりなる交差ヴォールトで補強された、とマンサーノは推測する。その後、リスボン地震を契機に、十字路外側、および回廊の柱間に外壁を建設して４つの庭園部を埋めることにより、現在の十字路パティオが18世紀後半に出現した。

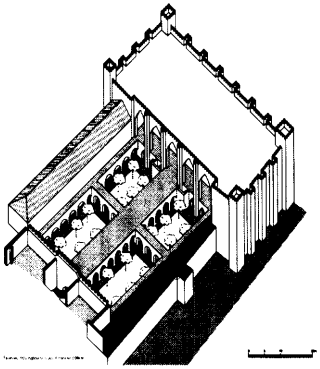

図12　セビーリャ王宮、『十字路パティオ』、ゴシック期推定鳥瞰図
（M.Á.Tabales による）

古代ギリシア・ローマの庭園ではニンフ神殿として人工洞窟が作られていた。ルネサンスにこの庭園建築の伝統も復活し、バロックの庭園でもテラスの下部や地下に多数の人工洞窟が建設されてきた。こうして建設された洞窟は水力を利用した水遊び空間として、熱い夏に涼しさを取る場所として重宝がられたのである。冷房のない時代、地下に埋もれた『マリア・デ・パディーリャの水槽』は酷暑の夏のセビーリャでは、唯一の涼しさを満喫できる場所であったに違いない。その涼しさと静けさは現在でも体験することができる。このことは上下二層の十字路が作られた段階で言えることでもあり、地下に埋められる以前の17世紀初め、ロドリーゴ・カーロはこの十字路パティオについてこう記述した。

「・・・『十字路』のパティオと呼ぶ。なぜなら、『十字形』をしているからだ。階段を使うことなくそこに入れるが、階下には４分割された『オレンジ』

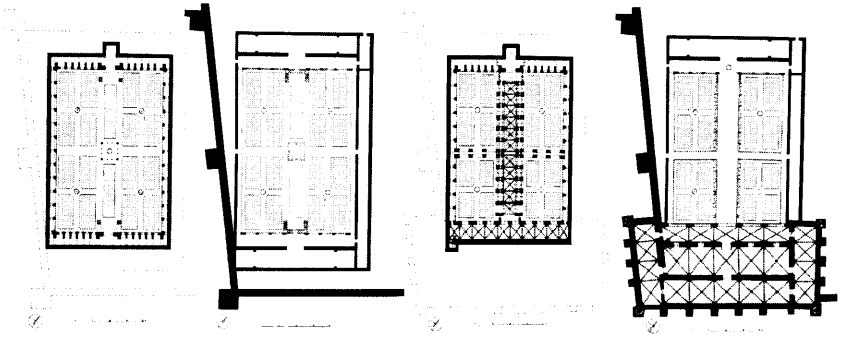

図13　セビーリャ王宮、『十字路パティオ』、ムワッヒド期およびゴシック期下層・上層推定平面図（A.Almagro による）

の地下庭園がある。このパティオ舗装面からずいぶん深い位置にあるため、新緑がパティオまで達することはない。この『十字路』は両側の透かし彫り控壁と強固なレンガと石造アーチの上に作られ、その下部には大きな池があり、上が『十字路』である全長を流れる。この庭園の周囲にも回廊があり、上部パティオの通路やテラスを支える。・・・（中略）・・・したがって、このパティオは享受できる大空のみならず、その驚くほどの広さ、かつ地下庭園への眺望により、誠に快適で広大であり、下部の覆われた場所は、夏には想像を絶する最善の日陰と涼しさを提供する。これは古イスラム王宮が残したものであろうと判断される。」[5]

しかし、スペインのイスラム庭園の遺構には上下二層の十字路パティオは存在しないこと、また現況からは、イスラム時代に十字路上層が存在したという根拠が全く見られないこと、さらに長手方向回廊の柱割が12スパンと偶数で、その中心に柱が位置し、この柱が横手十字路の障害になることなどから、アントニオ・アルマグロはゴシック期13世紀に上層の十字路が建設されたとし、イスラム時代は下層のみの十字路パティオであったと図13のような推定をする[6]。この指摘は極めて鋭い。なぜなら、前述したように、1997年からの発掘調査で明らかになった『モンテリア宮』パティオが落ち込んだ中庭であったこと、また後述するように、逆に十字路面から余りにも深い庭園部（広間床面からは4.7mの高低差）はイスラムのパティオに先例のないことなどから、その可能性は

極めて高いと判断されるからだ。ただし、イスラム時代に下層のみのパティオであった場合、アルマグロが推測するように、それが十字路パティオであったのか、十字路交点の中心に泉殿、長軸に池が存在したのか、池が存在した場合、現況のように縦軸十字路に切られていたのかどうかについても、何ら根拠はないのである。また図２－３でも明らかなように、このパティオが旧王宮の南側城壁まで広がっていることを考えると、元来は、マディナート・アル・サフラのように宮殿から南側に広がる十字路式の庭園であった可能性すら考えることができるであろう。そうした庭園が四方を建物で囲まれるパティオになり、二層の十字路パティオになった。この二層パティオがイスラム時代の12世紀であったのか、あるいはキリスト教時代の13世紀であったのかについては、にわかには判断できるものではないが、しかし、このきわめて独創的なパティオが13世紀に存在していたことは間違いない。

６．３．『石膏のパティオ』

現在の『石膏のパティオ』はトゥビーノにより19世紀末に発見され、1918-20年ベーガ・インクラン侯爵により修復され、さらに1969-71年マンサーノにより再び修復された。ただし「石膏の」という名称は中世再征服後以来呼ばれていた名称であり、その由来はアーケードの三角小間に使用されている石膏装飾によるとされる。事実、同手法はこのパティオで初めて出現する[7]。現パティオの構成、舗装、植栽はベーガ・インクランの修復時の産物であり、イスラム

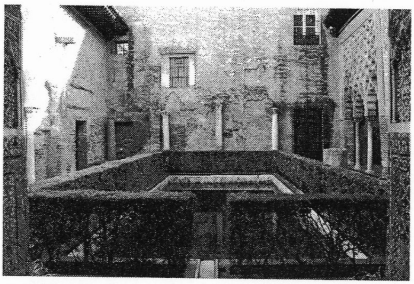

図14　セビーリャ王宮、石膏のパティオ

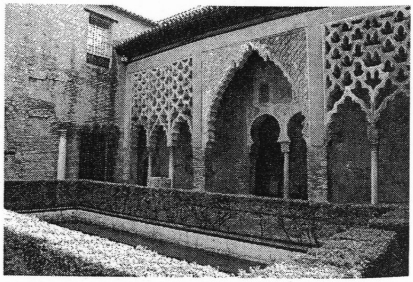

図15　セビーリャ王宮、石膏のパティオ、南側アーケード

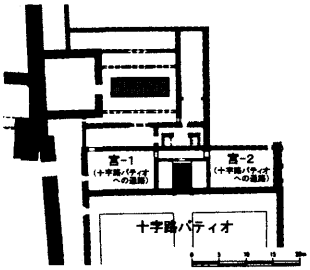

図16　セビーリャ王宮、石膏のパティオ、ムワッヒド期推定平面図（M.Á.Tabales による）

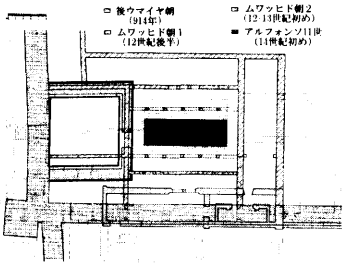

図17　セビーリャ王宮、石膏のパティオの変遷、後ウマイヤ朝からゴシック期までの推定平面図（M.Á.Tabales による）

時代のものではない。パティオ南面には前記したアーケード、その前廊に２連アーチの開口部が壁面中央に開けられ、細長い広間に導く。反対側の北面にも同様の３連アーチの開口部跡が見られることから、この前面にも前廊とアーケードが存在したであろう、と推測される。西側は木造ドーム天井を頂くクッバ（半球ドームを頂く立方体ホールで、本殿建築の雛型となる）、アルフォンソ11世（1312-50）の時代に改造された「裁きの間」（閣議室）である。キリスト教徒による改造部でありながらイスラム建築の様相を呈す。残す東側壁面には注目すべき痕跡は見られない。

1190年代のムワッヒド朝時代に改造されたであろう『石膏のパティオ』は図16のようであったと推測される。図17は後ウマイヤ朝時代（914）の城壁の位置、その城壁を取り壊すことなく建設された最初の『石膏のパティオ』（12世紀後半）、そして、南側城壁を取り壊して前図16に改造されたパティオ、さらにアルフォンソ11世によりクッバが改造された４時代の変遷を示す。西側のクッバ建築に関してはイスラム時代から現在より小規模の同形式ホールがあったとも推測されている。東面にも細長い広間が想定されているものの、ムワッヒド朝時代のパティオへの出入口の痕跡は残されていない。

パティオは南北２面にアーケードの前廊が付く形式であり、その前例は既に『カスティリェーホ』で見られた。ただし、ここでは長方形平面の長辺にアーケードの存在すること、およびパティオ中央に池が張られている点で異なる。マンサーノは、この池は短辺の壁面まで達しており、その壁面に沿って２つの

橋と、さらに幅広の橋を中央に掛けていた、と考える。アーケードを短辺に移動すれば、アルハンブラの『コマーレスのパティオ』の形式になる。また、ホール中央の出入口開口部の２連アーチの上方に２つの換気窓を穿つ方式、すなわち、酷暑の夏、地面に近い熱風を遮断するため扉を閉め、しかしながら、高所の少し涼し目の空気を取り入れる換気口を設けるシステムはアルハンブラでの定式だが、それがここで初出しているのである。

６．４．『インディアス通商院パティオ』

『インディアス通商院パティオ』は、1972年の新築マンションの計画が持ち上がったことを契機に発掘調査の機会を得ることができ、その後、復元的に修復され、今日見ることのできる極めて重要な遺構の一つになった（図19)。『インディアス通商院 Casa de Contratación』は新大陸との交易をコントロールする唯一の機関として1503年創設され、これを通しスペイン帝国は植民地交易の独占を1765年まで維持した。16世紀にはここで新大陸への遠征隊が組織され、マゼランはこのセビーリャから世界一周の船出をしたのである。しかし、インディアス通商院は新築ではなく、それ以前は重要人物の宿舎として王宮に属した。13-14世紀にはグラナダ王国初代のムハンマド1世(1232-1273)、あるいは亡命中のムハンマド5世（1354-59, 1362-91）などもこの宿舎の客人となった。

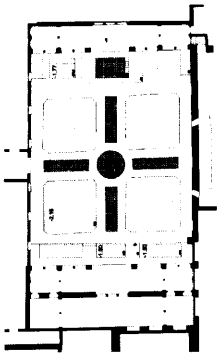

図18　セビーリャ王宮、インディアス通商院パティオ、復元平面図（L.R.Laca による）

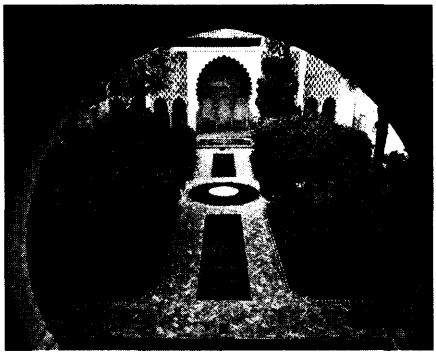

図19　セビーリャ王宮、インディアス通商院パティオ

しかし、元来は後ウマイヤ朝崩壊後の11世紀、旧王宮北西部に拡張されたアル・ムバラク宮であり、ムワッヒド朝時代にはすでに王侯貴族来客用宿泊施設になっていた。歴史の悪戯とも言うべきか、ムワッヒド朝に敵対したムルシア王マルダニスが死ぬと、その息子たちは同朝との和平を望み、娘の一人は王ユスフの兄弟アブ・ハフスの妃となった。これにより一族はセビーリャに移住し、その居住先に旧アル・ムバラク宮が与えられ、それを12世紀末から13世紀初めにかけて全面的に改造した[8]。これが修復されて現在に残るムワッヒド朝のパティオ（30.2×22.5m、図18-19）である。したがって、このパティオと『カスティリェーホ』とが類縁関係にあろうことが容易に推測される。

マンサーノは旧アル・ムバラク宮が既に十字路パティオを持っていたと推定する。新しい十字路はその十字路パティオをなぞる格好で植栽庭園から約２ｍの高さに建設された。同じ高さで四周の通路も作られ、ほぼ正方形の十字路パティオが形成される。縦横の十字路には両端に約1.1ｍ幅の通路を残し、深さ約１ｍの細長い池が切られ、交差部には円形の池に同形の噴水が設けられる。これら５つの池は実際には繋がり、交差部の池が円形になるよう橋が架けられている。また北側のアーケード前テラス中央には、『カスティリェーホ』のように単独の小池が設けられている。

前稿「スペインの庭（１）」で既に指摘したように、イスラムでは「楽園（パラダイス）」は宇宙の象徴的な表現であり、その宇宙は直角に交わる２つの運河により４分割され、運河の交差点には噴水、もしくは小建築（パヴィリオン）が置かれる。したがって、このパティオでも、ムルシアのダル・アス＝スグラ宮（同じ12世紀）と同じように、典型的なイスラムのパラダイス（楽園）の表現を見ていることになろう。すなわち、「十字路パティオ」は起源的に「楽園」を象徴するものであり、この『インディアス通商院パティオ』では起源に立ち返った造形になった、と言えるのである。

またコーランで頻繁に述べられている「楽園」の枕詞は常に「潺々（せんせん）と流れる川」であり、これ以外の重要な２大要素として、果樹の実と「影濃き木陰」や「（涼しい）日陰」を挙げることができる。

「だが信仰を抱き、かつ善行をなす人々に向かっては喜びの音信（たより）を告げ知らしてやるがよいぞ。彼らはやがて潺々（せんせん）と河水流れる緑園に赴（おもむ）くであろうことを。

その（緑園の）果実を日々の糧として供されるとき彼らは何と言うことであろう、『これは以前に（地上で）私たちの食べていたものとそっくりでございます』と。それほどによく似たものを食べさせていただけるうえに、清浄無垢の妻たち（古アラビアの伝説で天上の楽園に住むと言われる神女フール、すなわち「白色の乙女たち」）をあてがわれ、そこにそうして永遠に住まうであろうぞ。」（コーラン、Ⅱ-23）[9]

「だが信仰を抱き、義しい道を踏み行うもの、そういう人たちは潺々と河川流れる楽園に入れて、そこに永久に住みつかせてやろう。そこでは清浄な妻を何人もあてがおう。そして影濃き木陰にはいらせよう。」[10]

「敬虔な信者たちに約束された楽園を描いて見せようなら、潺々と河川は流れ、食いものは常に実り、（涼しい）日陰がいつもある。これが、敬虔な信者が戴く報酬。」（コーラン、XIII-35、傍点は著者による強調）[11]

この『インディアス通商院パティオ』においても、四分割された庭園部には果樹が植栽されていたであろうことが推測される。既に旧ムバラク宮時代のパティオ庭園にはバラ、スイセン、白百合、アネモネ、ニオイアラセイトウ、ヒヤシンス、ジャスミンなどの草花のほか、複数の椰子が繁っていた[12]。またこのパティオには、十字路面と植栽庭園部とで２m近い高低差のあることも重要である。この程度の差であるならば、前記した『十字路パティオ』（高低差約５m）の場合とは違い、庭園部に植栽されたであろう果樹の実を、十字路に立っていても座っていても取れたであろうからだ。エジプトの歴史家マクリジ Maqrīzī（1364-1442）によると、ジュマラワイ・イブン・トゥルン Jumarāwayh ibn Tūlūn（884-96）はフスタート（現カイロ）近郊の父アフマドの宮殿を増築し、動物園や有名な水銀の池を作らせたことで知られるが、パティオの庭園には「銀梅花やあらゆる種類の樹木や椰子を植え、それらの樹木からは立っていても座っていても果実を取ることができた。あらゆる種類の見事な果樹やバラの木を移植し、サフランを植えた。椰子の幹を美しい金色の銅で覆い、これら銅版と幹との間に鉛管を取り付け、その管により椰子の高い位置から水盤に水が注がれ、それからあふれる水で残りの庭園を散水した」[13]（傍点は著者による強調）。

この引用部に出てくる「立っていても座っていても」はパティオに高低差の

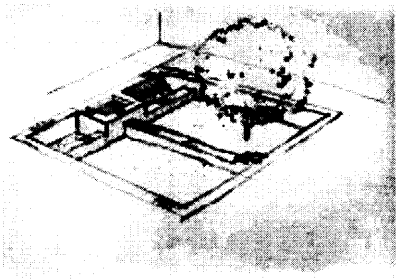

図20　セビーリャ、ミゲール・デ・マニャーラ邸跡地、ムワッヒド期パティオ（Vigil-Escalera による）

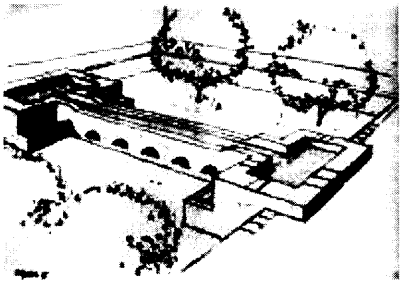

図21　セビーリャ、サン・ルイス地区、ムワッヒド期パティオ（Vigil-Escalera による）

存在したことを意味するであろうし、９世紀エジプトのイスラム宮殿にその例が既に見られることの証左にもなろう。上述した『モンテリア宮』のパティオでも、４周の通路は植栽部庭園部から1.5mの高さ、十字路は0.5mの高さであったから、前者では「座っていても」、後者では「立っていても」果実が取れたであろう。特に後者では「影濃き木陰」も提供されたに違いない。また、『十字路パティオ』ではその高低差から上層パティオからは果実は取れず、これに反し、下層のパティオでは「影濃き木陰」がふんだんに用意されたことであろう。この点からすれば、イスラム時代の『十字路パティオ』は下層のみで、東西の側通路のみが下部構造の回廊で支えられていた、と考えるべきであろう。

『インディアス通商院パティオ』の十字路と植栽庭園部との高低差についての異論はないものの、パティオの形状については最近ビヒル=エスカレーラやアルマグロにより別の推定が提出されている。

前者はマンサーノを引き継いだ現『パティオ』の修復者であり、現状の十字路パティオをムワッヒド朝時代の改造とし、それ以前存在したであろうパティオに対しては十字路の存在に疑問を抱いていた。特に、最近の考古学発掘によりムワッヒド朝時代のパティオ庭園遺構が同じセビーリャで複数 —例えば、ミゲール・デ・マニャーラ邸跡地の単一池のパティオ（図20）、サン・ルイス地区で発掘された二つ池パティオ（図21）— 判明しており、また、現状の北側アーケード前中央のくぼみに階段が見られることなどから、中央縦軸だけに通路の配された２分割パティオであり、その通路に切られた細長い池が南北アー

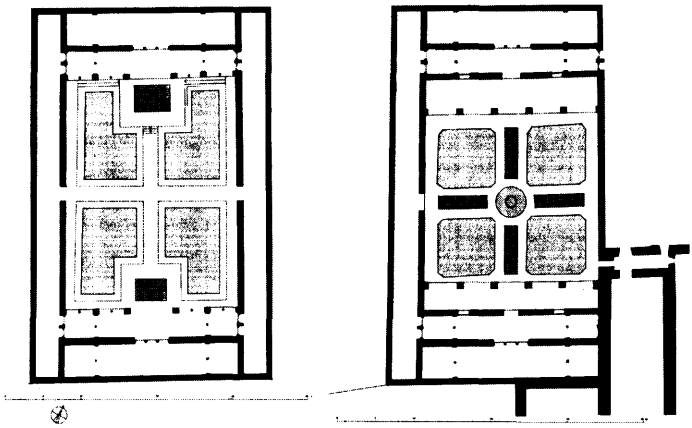

図22　セビーリャ王宮、インディアス通商院パティオ、ムワッヒド期(左)と14世紀ゴシック期(右)の推定平面図（A.Almagro による）

ケード前の２つの池を接続していたであろうと推測する。この方が現状の正方形十字路パティオに比べ、パティオ全体の長方形プランに合致しよう、とビヒル=エスカラーダは考える[14]。これは後述する同王宮の最近修復・復元された『ドンセーリャスのパティオ』の形状でもある。

この説を受け、アルマグロは次のような点を指摘し、別の推定を試みる。修復・復元された現状のパティオでは、南北のアーケード前に池、もしくは植栽用のくぼ地が発見されているが、これらの先例が見られず、不自然であること。北側前廊床面は南側のそれよりも約50cm高いのだが、この高低差の配慮が見られないこと。また、十字路により４分割され、落ち込んだ庭園部周壁には盲アーケードが施されているが、この手法はムワッヒド朝時代ではなく、14世紀に出現する珍しい装飾であること。さらに、交差部円形池の周壁を装飾する植物模様の壁画はムワッヒド朝装飾の特徴でもある幾何学的図柄であるよりも、より自然主義的であり、キリスト教世界の装飾を想起させること。また、これまでのセビーリャ王宮内での発掘調査で判明した特徴として、各時代で地表面が相違し、前時代のパティオ形状を踏襲していないことが判明していること。かつ、バヌ・アブバド（1021-91）時代の旧ムバラク宮の痕跡はこれまでの発掘調査では何一つ判明していないこと。これらのことから、ムワッヒド朝時代に改造

されたパティオは図22（左）のように南北のアーケード前に池を配した長方形の十字路パティオであろう、とアルマグロは推測する[15]。これは明らかに『カスティリェーホ』を意識した推測であろう。この推定では、十字路と周路とを南側前廊の床面に合わせ、北側アーケード前両側の東西通路を斜路とする。この結果、庭園植栽部は北側前廊より約２m、十字路からは1.2m程の深さになり、果樹との関係も２段階の楽しみ方ができる。

次にアルマグロは、現状の正方形内接の十字路プランに注目し、また、再征服後の特徴として、イスラム教徒とキリスト教徒との生活習慣の違いから、前者の旧住宅に後者の新住民が移り住む時、パティオ空間が内部空間の拡充により食いつぶされる傾向のあることに着目する。これらから導き出された推定が同じ図22（右）のパティオ（21.9×22.5m）であり、現状のように交差部を円形とした十字の池を想定する。

この正方形十字路パティオへの改造時期を推定するにあたり、アルマグロは次の点に注目する。４分割された植栽部庭園から立ち上がる十字路、および周囲の通路の壁面、さらに十字路に切られた十字池の壁面にはオリジナルの装飾が見られる。前者のレンガ造盲アーチは直線部で２段構えの尖頭アーチ、隅部で同じく２段の馬蹄形アーチ、そしてアーチ三角小間にはもう一つの小アーチが架けられ、涙状の窪みが形成されている。これらの装飾手法はキリスト教建築ではなく、イスラム建築に見られる特徴であり、後者の影響を受けたスペイン独自のムデハル建築にも見られる。ただし、それらの建築では頻繁に見られる手法であるから、時代は特定できない。他方、池の壁を装飾する壁画は直線部では幾何学装飾、円形部では写実的傾向の強い植物紋装飾が見られる。前者の幾何学紋装飾は時代性のない普遍的な手法であるから、これから時代を特定することは難しい。しかし、後者の写実的植物紋はイスラムではなく、ゴシック装飾に見られる特徴である。したがって、池の壁画はキリスト教徒によりゴシック期に装飾されたことになろう。他方、次項で述べるように、ペドロ王宮の植栽部庭園の壁に同じくレンガ造盲アーチ装飾の存在することがつい最近の発掘・復元修復で判明した。以上のことから、この十字路パティオは14世紀のペドロ王時代の改造で生まれたものであろうと推測される。なぜなら、13世紀のアルフォンソ10世による『十字路パティオ』はアーチやヴォールトに見られ

るように、極めてゴシック的な改造であり、イスラム的なムデハル要素は見られないからだ。つまり、再征服直後のキリスト教徒たちは純粋な西欧的建築言語に終始していたのに対し、1世紀後の14世紀にはイスラムとの融合から生まれたムデハル建築が隆盛していたと言う歴史的状況があったからである。

もしこの推測が正しく、十字路パティオが14世紀のキリスト教徒、おそらくペドロ王による改造であったとしたら、イスラムの楽園を象徴するはずの十字路パティオはどう解釈されたのであろうか。ペドロ王がイスラム文化を高く評価していた事実だけでも、この矛盾は解消されそうにも見える。しかし、キリスト教世界でも同様のシンボリズムが存在することに着目する必要があろう。コーランでもエデンの園は楽園を意味し、旧約聖書によれば、この楽園には一つの川から生まれる４つの川が流れ、その中心には「命の木」と「善悪の知識の木」が存在することは、前稿で既述したところである。したがって、イスラム的楽園は即キリスト教的楽園にもなり、この正方形十字路パティオはキリスト教世界でも楽園の象徴になり得ると考えられるのである。

６．５　ペドロ王宮『ドンセーリャス(女官たち)のパティオ』

図３で示したように、ペドロ１世残虐王によるムデハル建築の『ペドロ王宮』はムワッヒド朝時代の宮－１から宮－５を取壊し建設されたものであり、その正面広場として同じイスラム時代の『モンテリア宮』が取壊され、「モンテリアのパティオ」が整備された。ペドロ1世（1334-69）はアルフォンソ11世の嫡子であり、若くしてカスティーリャ・レオン王国の王位（1350-69）を継承する。しかし、異母兄弟エンリケ・デ・トラスタマラ（1333-79）に王位を取らせようとする反対派との内戦（1366-

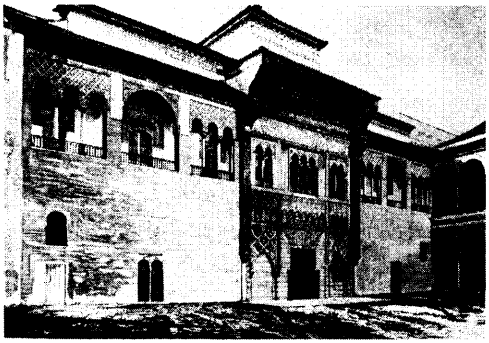

図23　セビーリャ王宮、ペドロ王宮、正面、1870年代の写真

69）が勃発し、ペドロ王は暗殺されることになる。この内戦は前者にフランス、後者にイギリスがつくキリスト教徒陣営内での紛争であった。他方、グラナダ王国ナサリ朝（1237-1492）はイベリア半島に残された唯一のイスラム政権であり、当然ながらキリスト教国とは敵対関係にあった。しかし、このナサリ朝もまた、北アフリカに生まれては消え失せたイスラム政権と常に友好関係にあったわけではなく、各王国の内紛が絡み、敵対することもしばしば起こった。グラナダ王国が最盛期を迎える８代目の王ムハンマド５世（1354-59, 62-91）はアルハンブラ宮殿の主要部を建設した王として知られているが、この王もまた、異母兄弟イスマイル２世（1359-60）を推す勢力の反乱により王位を追われており、王位への復帰に際しては友人のペドロ１世の支援を受けた。また後者が、反対勢力のエンリケ派についたアラゴン王国ペドロ４世（1336-87）と敵対関係に入ると、今度はイスラム王のムハンマド５世がペドロ１世を助けているのだ。すなわち、この時代のスペインでの勢力図は宗教により分かれるほど単純なものでなく、複雑に絡み合う関係にあった。殊に、キリスト教徒ペドロ1世とイスラム教徒ムハンマド５世は宗教を越え、極めて友好な関係にあったのである。

このことを象徴する歴史建築がこの『ペドロ王宮』である。この王宮の建設に際してはグラナダからイスラム職人が送られ、中央のトレードからはムデハル職人が派遣された。もちろん、地元セビーリャのムデハル職人が主体であったことであろう。前述したように、ムデハルとはキリスト教圏に住むイスラム教徒を意味するから、イスラムの職人によってキリスト教の王宮が建設されたことになる。だからこそ、この王宮はアルハンブラ宮殿と同じようにイスラム建築に見えるのだ。しかし、歴然としたキリスト教建築でありながら、そうではなく、イスラム建築に近いことから、こうした建築をムデハル建築と呼ぶ。それ故、この王宮は『ムデハル王宮』とも呼ばれる。例えば、壁面装飾はいわゆるアラベスクと称する幾何学、唐草、およびアラビア文字からなるイスラム装飾でなされているものの、この三つ目のアラビア語は裏側では同内容のラテン文字に翻訳されて装飾に参加しているのである。

キリスト教建築でありながら、この王宮では正面玄関から左右対称の透視の効いたサロン風廊下に入ることも、またその大廊下を通ってメインのホール空

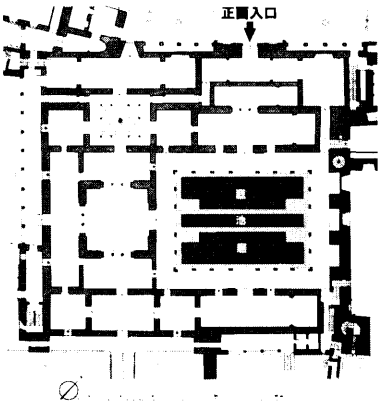

図24　セビーリャ王宮、ペドロ王宮、平面図
(A.Almagro による)

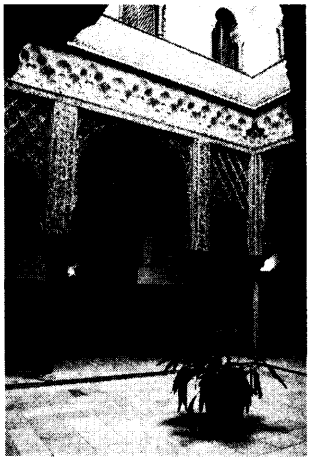

図25　セビーリャ王宮、ペドロ王宮、ムニェカスのパティオ

間に達することもない。玄関を入ると、先ず大きな壁にぶち当たる（図24)。空間の大きさから訪問者は左手のホールに導かれる。そのホールに達しても、次の空間が見えるわけではない。入って右側の細い通路の奥に光が見えることから、こちら側が進むべき方向だろうと察する。後になれば、この通路側が内玄関であることに気が付く。そして、この薄暗い通路を抜けると、予期せぬ水と緑の大空間が出現する。これが『ドンセーリャス（女官たち）のパティオ』(21×15m, 図26-27）であり、この入口から最も離れた場所に接見ホールである『大使たちの間』が鎮座する。また、正面玄関を入り、突き当たりと想われる右手に曲がってみると、そのコーナーに細い隠れ通路の潜んでいることに気付く。正しく隠れ通路と思われるその薄暗い通路に入り、さらに右手に曲がると、その奥から光が漏れ、そちら側に直進することを促される。そして、小さい明るい空間に達する。これが『ムニェカス（人形たち）のパティオ』(図25)である。このような動線の折れ曲がりや、不意打ちを食らわせるような空間の配置はイスラム建築の特徴であるから、このペドロ王宮は装飾や建築部材のみならず、空間構成においてもイスラム的であり、この点からもムデハル建築にふさわしい作品と言える。そして、パティオという面を中心に王宮が構成されている点でもイスラム的でもある[16]。

『ムニェカスのパティオ』が小さく、潜んで位置する私的空間の中心とすれば、『ドンセーリャスのパティオ』は明らかに公的空間のコアを形成するものであろう。前者は大理石床の中心に現在は植木鉢が置かれているものの、1560年の修復要望書や給排水管の痕跡から、同じ場所にかつては噴水があってであろうと推測される。後者もまた、以前はその中心に噴水があるだけの総大理石張りパティオであっが、今では中央縦軸（幅約４m）の細長い池（13.5×1.98m）と、２分割された植栽部庭園に変わっている。これは2002年と2004年の同パティオの発掘調査に基づく復元・修復の結果であり、より詳細なイスラム時代の王宮跡やペドロ王宮の変遷などが同時に明らかにされた[17]。

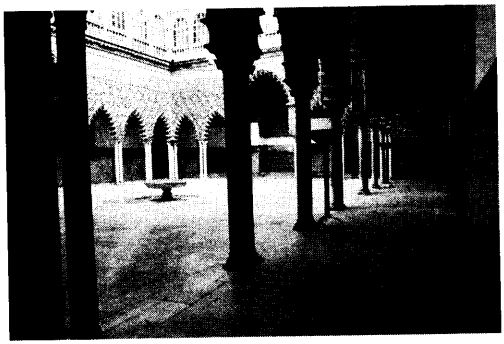

図26　セビーリャ王宮、ペドロ王宮、ドンセーリャスのパティオ、1970年代の写真

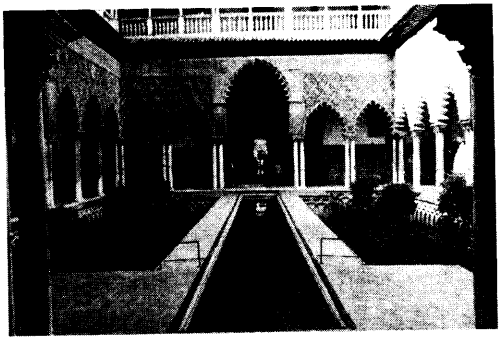

図27　セビーリャ王宮、ペドロ王宮、ドンセーリャスのパティオ、復元後の現況

このムデハル王宮はペドロ王により1356年から1366年の間に建設される。ただし、一度として完成することはなかった。例えば、メインホールの『大使たちの間』の木造ヴォールト天井は15世紀の作品であり、『ドンセーリャスのパティオ』の２階回廊は16世紀に増築される。また同パティオでも当初から計画変更があり、その後、何度かの改造があったことが今回の発掘調査で推測されるようになった。1356年の建設当初、長方形パティオには短辺側回廊前に２つの小池が計画され着工された。これは11世紀サラゴザのアルハフェリア宮殿、12世紀の『カスティリェーホ』や同じ13世紀のコルドバ新王宮のパティオに見られた形式である。その後、２つの小池間の中央縦軸に材料の異なる基礎が打

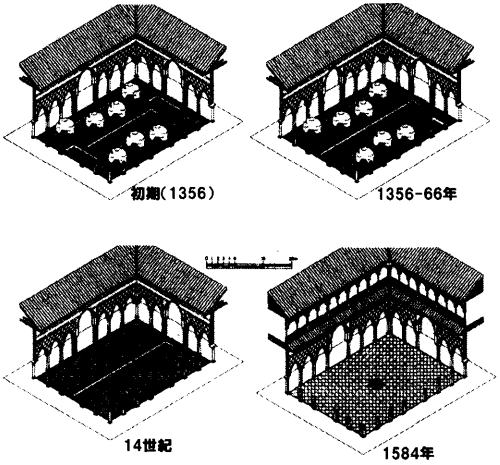

図28　セビーリャ王宮、ペドロ王宮、ドンセーリャスのパティオ、計画当初からの変遷（M.Á.Tabales による）

たれ、両池を繋ぐ細長い池と通路が設けられ、２つの１m程落ち込んだ植栽部庭園が形成される。３つの池が独立していたのか、あるいは連続してH型の池を形成し、細長の胴体部と端部の池との間に橋がかかっていたかは定かでない。ここまでは一度完成したものの改造ではなく、1356年建設当初の設計変更であった、と発掘調査担当者のタバレスは推測する。２つの小池を繋ぐ池の形式は、前述したように同時代のセビーリャのミゲール・デ・マニャーラ邸やサン・ルイス地区の邸宅のパティオに見られ、また同じセビーリャ王宮の『インディアス通商院パティオ』でビヒル=エスカラーダが推測した形式でもあった。さらにその後の1366年までに、２つの小池の両サイドが埋め戻され、３つの池は一つの細長い池に統合される。この状態が2004年に復元された現状である。その後、２つの植栽部庭園が埋められ、中央縦軸の細長い池だけのパティオに改造されるのだが、その庭の埋め戻しに使用した土砂には14世紀以降の陶器片が皆無であったことから、ペドロ王暗殺後の14世紀中に埋められたのであろうと推測される。池は1560年の資料ではまだ存在する。1583年の改修ではパティオの舗装張り変え作業で白黒の敷石（約84cm角×707個）約490㎡を使用しており、また翌1584年には４つの紋章の刻まれた大噴水の清掃をもってこの時の改修が終了していることから、この時点までに残されていた池が埋められ、パティオ中央に大噴水の設置されていたことが判明する。

この大噴水をパティオ中心に配す形式は、同16世紀の同じセビーリャに建設された同じくムデハル建築、この場合はイスラム風のルネサンス建築であるピ

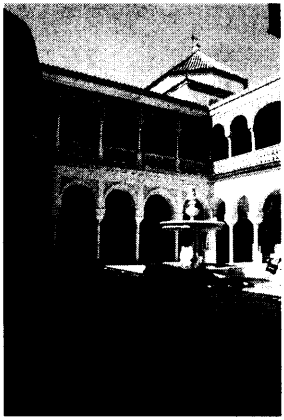

図29　セビーリャ、ピラトス館(16世紀)、パティオ

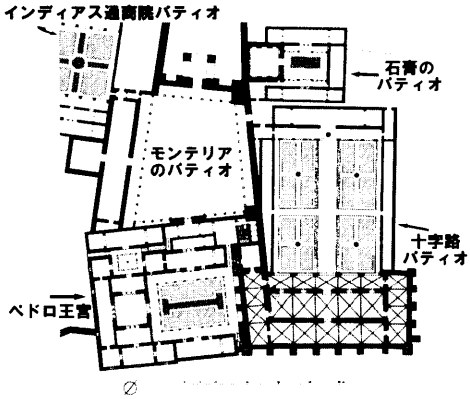

図30　セビーリャ王宮、ペドロ1世残虐王による王宮整備推定図（A.Almagro による）

ラトス館（図29）にも見られる。これは静的で観賞する場としてのイスラムのパティオから動的で社交の場としての半屋外空間であるキリスト教徒のパティオへの変換であろう。

しかし、14世紀末までに両側の植栽庭園が埋められた原因は、元々、庭園としての注水と排水システムが完備できなかったことにありそうだ。計画では中央の池の８つの排水口から庭園に水を注ぐ予定であったが、その排水・注水口は一度として機能しなかったようであり、また唯一の例外を除き庭園自身に排水口が用意されなかったことから、大雨の時の排水が困難であったと推測される。また、庭園には柑橘類栽培用の数か所の穴以外は数センチの土が敷かれるのみで、植栽にも適していなかったようだ。こうしたことから、結局は石張りのパティオにならざるを得なかった。

いずれにしても、この中世後期のセビーリャ王宮には極めて注目に値するパティオが併存したことになる。『モンテリア宮』のパティオ全体が沈んだ十字路パティオ、縦軸ではなく、横軸に池が配され、その池には広間中央の噴水から注水される『石膏のパティオ』、上下２層の、下層中央縦軸に池を配した『十字路パティオ』、同じ十字路パティオでもその十字路に十字の池が切られ、４つの沈んだ植栽庭園を持つ『インディアス通商院パティオ』、そしてペドロ王宮の中央噴水の『ムニェカスのパティオ』と中央縦軸の池と２つの沈んだ植

栽庭園よりなる『ドンセーリャスのパティオ』との併存である。このうち『モンテリア宮』のパティオは取り壊されてムデハル王宮前の広場に姿を変えたものの、その他はペドロ王のもとで再統合され、各パティオがそれぞれの機能を付与され、全体でオーケストラを演奏する王宮として出現した。これは、カスティーリャ・レオン王国の王権誇示を目的とした具体的な表徴と理解すべきもの、とタバレスやアルマグロは考える[18]。このようにパティオをコアとした複数の王宮が全体で一つの王宮を形成するシステムは次稿で述べるアルハンブラ宮殿にも共通する特徴であろう。後者もまた、異なる時代に建設された複数の王宮から成り立っているのである。

7．グアダラハーラ王宮

マドリードより東北東約50kmに位置するグアダラハーラ県の同名県庁所在地入口にはイスラム時代の橋が現存し、市内にはムデハル建築のサンタ・マリア教会堂（14世紀）やルイス・デ・ルセーナ礼拝堂（16世紀）が残る。殊にゴシック末期のイサベル様式（ムデハルとゴシック末期建築との融合）を代表するイ

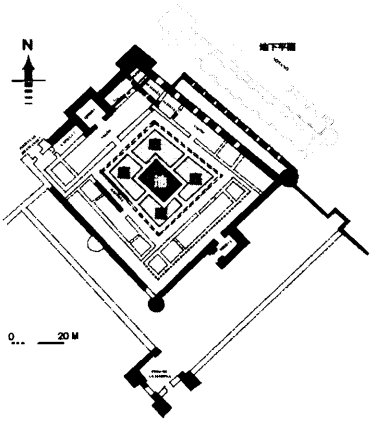

図31 グアダラハーラ王宮、平面図
（Julio Navarro Palazón による）

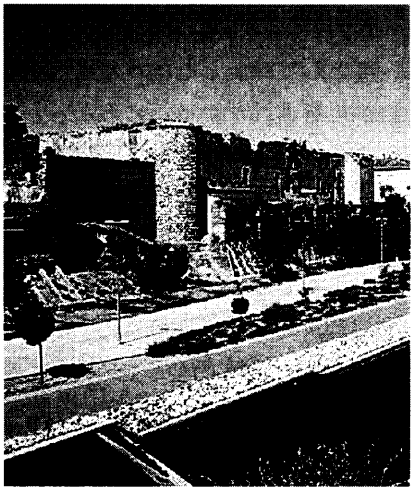

図32 グアダラハーラ王宮、北東部外観

ンファンタード館（15世紀）はグアダラハーラを象徴するモニュメントとして知られている。この館から直ぐ近くの同市入口には王宮跡が存在する。フーリオ・ナバロ・パラソン率いる調査団がこの廃墟を2期（2004-05、2006）にわたり発掘し、見事な成果を収める。発掘調査で判明した結果が図31の平面である[19]。

この王宮に関しては以下の4期の建設時代が知られている。すなわち、9-11世紀のイスラム時代の城塞、中世後期（14世紀）のムデハル建築の伝統を受け継ぐ王宮、王立毛織物工場（18世紀）、および兵舎（19世紀）の4時代である。今回発掘された王宮跡は第2期のムデハル王宮に相当し、この王宮はセビーリャのムデハル王宮を建設したペドロ1世残虐王の父王アルフォンソ11世（1312-50）によるものであろう、と推測されている。ただし、どの程度イスラム時代の城塞を利用したのかは判明していない。フェルナンド3世、サンチョ4世、アルフォンソ11世などのカスティーリャ王が一時期ここに居住し、1390年と1408年には王国議会が開催された記録が残されている。

判明した王宮は、ほぼ正方形（72×62m）の野石積み組積造本体と南西の土造壁拡張部よりなる。この拡張部南西角部に外門、本体南壁中央に内門（13.5×8.4m）が配され、この内門対面の北壁中央に正方形（8.7×8.8m）の玉座の間と想定されるクッバ、その前に横長の広間と柱廊が位置する。この柱廊は中央の十字路パティオを取囲む回廊の一翼を形成し、その中心に池が置かれる。東壁は最も保存状態が良く、その前が断崖になっていることから、地階部が存在し、その上にテラスが形成される。ジグザグ行進の門の構成、パティオを中心とした王宮、十字路と池のパティオ、それからアーケード、前廊、横長広間、玉座のクッバよりなる構成は、スペイン・イスラムの特徴であり、ムデハル建築にも継承された特色であった。この十字路パティオの中央池を噴水に置き換えれば、アルハンブラのライオンのパティオの構成が得られる。ただし、前者のパティオ回廊の柱は大理石円柱ではなく、6角形断面の柱であった。グアダラハーラのこのムデハル王宮がアルフォンソ11世の時代、すなわち14世紀前半であり、ライオンのパティオは同世紀の後半であることから、前者から後者への影響の可能性は十分にあろう。

8．トルデシーリャス王宮

新大陸でのスペインとポルトガルの植民地分界線（教皇子午線）を取り決めたトルデシーリャス条約（1494）で知られるこの街は、マドリードから北西へ約180km、県庁所在地のバリャドリードからは南西に約30kmに位置する。宮廷が移動していた中世において、トルデシーリャスもまた王国議会の開催地となり、国王の居住する場所になった。前記条約がこの地で締結されたのはこうした事情による。

この王宮もまたアルフォンソ11世による建設とされる。同王はグラナダ王国との戦闘を再開、1340年のジブラルタル海峡近くでのエル・サラードの戦いに勝利し、1344年には重要な港町アルヘシラスを占拠する。これらの戦いを記念する石碑が正面壁に発見されたことから、この王宮は1340-44年頃建設された、と推測されている[20]。王宮にはアルフォンソ11世の愛人レオノール・デ・グスマンが住み、その後の同王嫡子のペドロ１世の代には同じく愛人のマリア・デ・パディーリャが居住したが、1363年には、王女ベアトゥリスとイサベルが父ペドロ１世により移譲されたこの王宮にサンタ・クララ修道院を設立させ、その後は王立修道院として多くの増改築がなされてきた。そのため、現存する修道院は中世の王宮時代とはかなり異なるし、王宮の復元設計もなされている。こうした復元研究の中で、王宮建設で使用されているモデュール64cmが発見され、これは当時のイスラム圏のみならず、セビーリャの

図33　トルデシーリャス王宮（現王立サンタ・クララ修道院）、南側外観

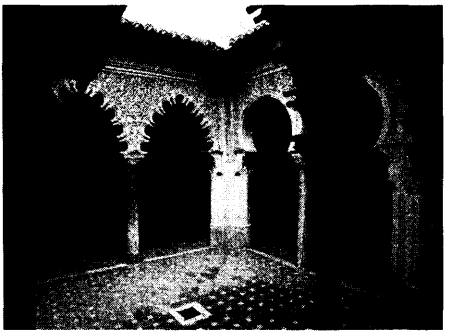

図34　トルデシーリャス王宮、『アラブのパティオ』

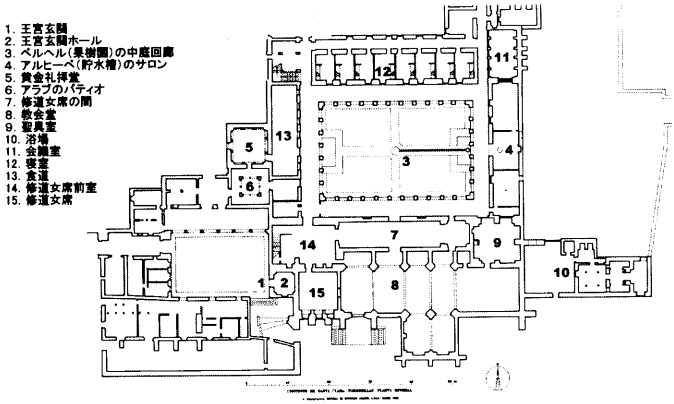

図35　トルデシーリャス王宮、現況平面図（A.Almagro による）

ペドロ王宮でのモデュールでもあることから、王宮自身がペドロ1世の作品であろうとする新説も出されている[21]。しかしながら、黄金礼拝堂ではムワッヒド朝時代風のアルカイックな装飾が見られ、正面玄関ホールや教会堂入口部に残るアーチには同時代アルハンブラ宮殿を彷彿させる洗練された繊細な装飾が施されていることから、２時代、すなわち前者のアルフォンソ11世の時代と後者のペドロ１世の時代にわたり建設されたと考えるのが妥当であろう。

現修道院（図35）は３つのパティオよりなる。玄関前の長方形パティオ、黄金礼拝堂前正方

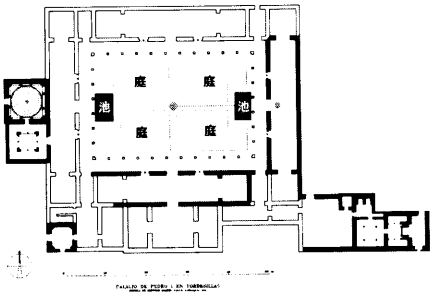

図36　トルデシーリャス王宮、14世紀の推定平面図（A.Almagro による）

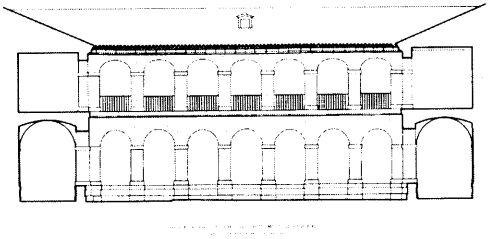

図37　トルデシーリャス王宮、『ペルヘルの中庭回廊』、現況（A.Almagro による）

形の「アラブのパティオ」(図34)、および中心の広大なパティオである「ベルヘルの中庭回廊」(図35の1, 6, 3) である。1988-90年の発掘調査に基づきアルマグロが14世紀王宮の復元 (図36) を試みているように、玄関前のパティオは後世に形成されたものであろう。セビーリャのペドロ王宮と比較すると、黄金礼拝堂前の回廊で閉じられた「アラブのパティオ」は私的な「ムニェカスのパティオ」に、同じく回廊を巡らされた中央の「ベルヘルの中庭回廊」は公的な「ドンセーリャスのパティオ」に対応しよう。

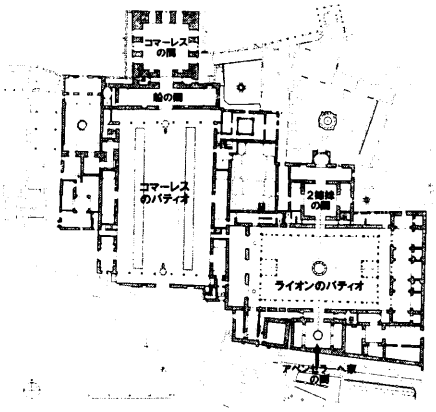

図38　グラナダ、アルハンブラ、14世紀王宮の中核部 (A.Orihuela による)

「ベルヘルの中庭回廊」はアルマグロが推測するように回廊に囲まれた十字路パティオであろうし、短辺の回廊前には池が配され、十字路の交差部には噴水が存在した。現在は17世紀のクラシックな回廊 (図37) に改造されているから、当時のムデハル建築の面影は見られない。この十字路パティオは12世紀の『カスティリェーホ』のパティオと同タイプであり、同じアルフォンソ11世により着工されたコルドバ新王宮の十字路パティオに酷似する[22]。しかし、回廊で全面的に取り囲まれるのは前項のグアダラハーラ王宮とこのパティオ、さらにはセビーリャの『ペドロ王宮』であり、このパティオの池を泉殿に置き換えれば、アルハンブラの「ライオンのパティオ」の構成が得られる。ここで特に注目すべきことは、イスラム庭園に派生したムデハル王宮のパティオに回廊が巡らされ、これがキリスト教修道院の「中庭回廊 (クロイスター)」に変換されていることだ。「中庭回廊」はキリスト教修道院では極めて原初的なコア空間として不可欠な構成要素であり、スペインでは大聖堂においても伝統的に必ず存在する空間と化している。すなわち、イスラム建築である「ライオンのパティオ」の回廊はスペインにおけるキリスト文化との共生、しかもこの14世紀特有の融合文化から生まれたものであろうことが推測されるのである。

アルハンブラのパティオ構成と類似する側面から、このトルデシ―リャス王宮の空間構成を検討するのも面白い。ベルヘルのパティオ（中庭回廊）では、長軸の池に面してアーケードと前廊（＝回廊の一辺）、それに並置され、両端にアルコーバ（寝室）を持つ細長のホール空間、さらに正方形空間の黄金礼拝堂が続き、これら３つで一連の連鎖空間を形成する。ただし、アルマグロの推定図では前室のホールから黄金礼拝堂には直接入れるようになっていないが、同室中央に入口の存在を想定することとする。この礼拝堂は謁見の間となるクッバに相当するに違いない。アルマグロの推測では、同様の連鎖空間が南側の回廊部分にも見られる。恐らく、この南側がペドロ１世の玉座の間、そして東側の黄金礼拝堂はアルフォンソ11世の玉座の間と考えられよう。これらの連鎖空間がアルハンブラのコマーレスのパティオを中心としたユスフ１世宮で見られるのである。すなわち、アーケードと前廊、それに並置され、両端にアルコーバを持つ細長いホールの「船の間」、そして最後に玉座の間であり、「大使たちの間」とも呼ばれる「コマーレスの間」へと連鎖する空間構成である。また同連鎖空間は、細長いホールが矮小化されたとは言え、ムハンマド５世宮ライオンのパティオの「アベンセラーヘ家の間」にも見られる。同パティオの「２姉妹の間」でも同様の空間連鎖が見られるものの、さらに正方形空間のクッバ「２姉妹の間」の背面に細長いホール「アルヒメセス（２連アーチ窓）の間」とほぼ正方形の小空間「ダラーハ（または、リンダラーハ）の展望台」に連鎖する。この展望台は玉座に相当するであろう。このクッバ背面の細長い空間の配置はセビーリャ『ペドロ王宮』の玉座の間である「大使たちの間」にも見られる。このように酷似した空間構成が14世紀スペインのキリスト圏とイスラム圏双方の王宮での顕著な特徴として見られるのである。

（続く）

注

1　「スペインの庭（1）」は『麒麟』（神奈川大学経営学部十七世紀文学研究会）第18号、2009年3月、pp.108（13）-88（33）に掲載される。

2　*Apuntes de Alcázar de Sevilla*（以下、*AAS*と略す）, Sevilla; Patronato del Real Alcázar y de la Casa Consistorial, N°.1-9（2000-08）この年報には最近の調査・研究・修復作業についての詳細な報告が見られる。同年報はデジタル版として下記でも参照できる。

http://www.patronato-alcazarsevilla.es/index.php?modo=enlaces&m=41&idcat=18&ver=41 (2008-12-24検索)

3 Tabales Rodríguez, Miguel Ángel: "Investigaciones arqueológicas en el Alcázar de Sevilla: Apuntes sobre evolución constructiva y espacial", *AAS*, N°.1(2000), pp.12-45

4 Manzano Martos, Rafael: "Casas y palacios en la Sevilla almohade. Sus antecedentes hispánicos", en *Casas y Palacios de Al Andalus,* Madrid - Barcelona; Lunwerg Editores S.A., 1995, p.342 / Manzano Martos, Rafael: "Los palacios", en *Sevilla almohade,* Sevilla; Universida de Sevilla, Junta de Andalucía y Ayuntamiento de Sevilla, 1999, pp.65-67

5 Caro, Rodrigo: *Antigüedades y principado de la ilustríssima ciudad de Sevilla,* Sevilla, 1635, Lib.II, cap.V, folio 56r (Torres Balbás, Leopoldo: "Patio de Crucero", en *Obra dispersa I - Al Andalus,* Madrid; Instituto de España, 1983, Vol.6, pp.300-23 / en *Al-Andalus,* Madrid, 1958, Vol.XXIII, p.181)

6 Almagro Corbea, Antonio: "El Patio del Crucero de los Reales Alcázares de Sevilla", *Al-Qantara* (Madrid-1999), Vol.XX, Fasc.2, pp.331-76 / *El Patio del Crucero del Alcázar de Sevilla* (realizado por la Escuela de Estudios Árabes, CSIC), Sevilla; Patronato del Real Alcázar, 2005

7 Manzano Martos (1995) p.343 / Manzano Martos (1999) p.70

8 Manzano Martos (1995) pp.347-79

9 『コーラン上』(井筒俊彦訳、岩波文庫33-813-1) 岩波書店、昭和50年、p.15

10 同上、pp.119-20

11 『コーラン中』(井筒俊彦訳、岩波文庫33-813-2) 岩波書店、昭和49年、p.53

12 Rubiera, María Jesús: *La arquitectura en la literatura árabe,* Madrid; Ediciones Hiperión, 1988, p.174

13 前注 Rubiera (1988), p.84

14 Vigil-Escalera Pacheco, Manuel: "Un prototipo sevillano de Jardín Islámico", *Aparejadores* (Sevilla), N°.67 (julio 2005), pp.64-70

15 Almagro Corbea, Antonio:"Una nueva interpretación del Patio de la Casa de Contratación del Alcázar de Sevilla", *Al-Qantara* (Madrid), Vol.XX, Fasc.1 (enero-julio de 2007), pp.181-228

16 動線の折れ曲がり、不意を突く空間配置、面を中心とした空間構成等の諸特徴はイスラム建築やムデハル建築に共通するばかりでなく、スペイン建築の不変的特質でもあったことはチュエッカの下記名著で明らかにされている。Chueca Goitia, Fernando: *Invariantes castizos de la arquitectura española,* Madrid; Dossat, 1981 (1947, 初版). 邦訳『スペイン建築の特質』(鳥居徳敏訳) 鹿島出版会、1991

17 Tabales Rodríguez, Miguel Ángel: "El Patio de las Doncellas del Palacio de Pedro I de Castilla. Génesis y transformación", *AAS,* N°.6 (2005), pp.6-43

18 Almagro Corbea, Antonio: "La recuperación del jardín medieval del Patio de las Doncellas", *AAS,* N°.6 (2005), pp.44-67 / Almagro Corbea (2007), pp.199-208

19 Escuela de Estudios Árabes de Granada (CSIC): *Excavaciones arqueológicas en el Alcázar de Guadalajara (1ª campaña),* http://www.eea.csic.es/index.php?option=com_

content&task=view&id=67（2009年1月17日検索）/ *Excavaciones arqueológicas en el Alcázar de Guadalajara (2ª campaña),* http://www.eea.csic.es/index.php?option=com content&task= iew&id=83（2009年1月17日検索）

20 Lampérez, Vicente: *Arquitectura civil española de los siglos I al XVIII: Tomo primero, Arquitectura privada,* Madrid, 1922;（再版）Madrid ; Ediciones Giner, 1993, pp. 429-35

21 González Hernández, Ángel: "De nuevo sobre el Palacio del Rey Don Pedro I en Tordesillas", *Reales Sitios* (Revista de Patrimonio Nacional, Madrid), Año 44, N°.171, primer trimester de 2007, pp.4-21

22 前稿「スペインの庭（1）」『麒麟』を参照